



無趣味の趣味

日本証券クリアリング機構
代表取締役社長

しずか まさき
静 正樹

錚々たる顔触れが趣味や思い出を綴ってこられたこの欄の執筆を頼まれ、無趣味で語るべき感動的な思い出もない私が、一体何を書いたものやら、と思いがぐねっていたところ、かつての部下が私を評した珠玉の一言を思い出した。

「履歴書を書くとしたら、特技仕事、趣味家族、って書いたらいいんじゃないですか。」

言い得て妙だ。

社会人生活は東証の職員としてスタートした。当時は非営利の法人であり、転勤がない、人数が少ないといった特殊性もあって、とてもアットホームな組織だった。

生家が商家で、いやいやながら家業を手伝わされたことのある私の目から見ると、サラリーマンの世界はまるで総合レジャーランドのようだった。

労働には対価が支払われ、通勤には定期券が支給され、食事は安価に提供され、夜は先輩を捕まえれば出費無用で居酒屋に行ける。あとは楽しく仕事ができれば24時間楽しいじゃないか、と気づき、それを実践していた。

音楽やスポーツは嫌いではないが、わざわざ時間を作ってまでやりたいとは思わない。趣味を聞かれると困るな、趣味は仕事としか言いようがないな、と思っていた。

しばらくして家庭を持ち、夜の居酒屋への出勤回数が激減して、家での子育てにとって代わり、それもひと段落しつつあったころ、一緒に働いていた部下から頂戴したのが、先程の一言。

「そうか、私にとっての仕事は趣味じゃなくて

特技だったのか。」と腑に落ちた。楽しく仕事をするためには、必要な知識や手順といった「技」を極める必要がある。長年かけて磨いた技があれば、それは特技に違いない。



では趣味はどうだ。ずっと付き合っても飽きのこないものが趣味だとすれば、なるほど、家族か。

生家では、家族は家族であると同時に仕事仲間でもあったが、私の家では家族はただの家族だ。お互いに働いている姿を見ることもない。

それでも家族は、同じ時代を最後まで助け合って生きる社会の最小構成単位であることに変わりはないし、その家族と過ごす時間が楽しくなければ、24時間楽しいとは言えない。

かくして私の場合、「特技仕事、趣味家族」との自覚に至った。

コロナ禍にあって、どこの家でも家族と過ごす時間が圧倒的に増えている。それが原因で、もめごとの絶えない家族もあれば、絆を深める家族もある。

私にとっても、無趣味の趣味が試されるときだ。